

遠軽町



石北線(旭川〜網走間)の鉄道敷設請願運動は明治43年に始まり、15年の長きにわたって関係町村長や住民代表による激しい運動が展開されていきました。この一帯は交通の便が悪く、遠軽〜旭川間は名寄線経由で約8時間を要し、食糧など生活物資の輸送費がかさみ、他の地域より物価が高騰しました。特に白滝では、遠軽までの10里余(約40km)の道のりを、すべて徒歩や駄馬で往復しなければならなく、鉄道の早期敷設は地域住民の悲願でした。



イラスト:安彦良和(漫画家/遠軽町出身)

ところが大正13年、政府は石北線敷設工事の延期を決定。その理由は、第一次世界大戦による不況と、前年に発生した関東大震災の災害復旧に伴う財政緊縮策をとったためです。これに驚いたのは、遠軽をはじめとする北見地方の住民達です。石北線の開通で、遠軽〜旭川間が4時間も短縮する見込みのため、それまで分岐点で争っていた生野地域も、驚きを隠せませんでした。これに対し遠軽では、鉄道敷設を早急に実現させるため、陳情団を組織し、国会に直訴することを決定しました。しかし、上京に必要な資金が部落会費では足りず、自己負担額は当時の小学校教員の初任給にあたる50円と高額でしたが、遠軽・丸瀬布・白滝地区から有志者が52名も集まりました。さらに、パンの有名ブランド「マルキパン」創業者、「東洋のパン王」と言われた、大阪の水谷政次郎が協力を申し出ました。彼は石北線の開通を見込み、沿線の小清水と丸瀬布に、パンの原料の小麦粉栽培農場を開設していましたが、北海道から大阪にあるパン製造工場への円滑な物資輸送が重要であると考えていましたが、石北線の工事延期で、この地域に農場を開設した意味が無くなってしまふ。水谷は、予定通り工事が行われるならばどんな事でもしようと、北海道農場の支配人であった市原多賀吉を陳情団の団長に据え、さらに1万円の出資で応援を決定。これにより、陳情団は自己負担金を出すことなく、運動に専念できるようになりました。



市原 多賀吉

名寄線経由で札幌に向き、鉄道局、道庁、他関係政党支部に石北線早期敷設を陳情した後、3日後には東京に到着しました。その一方、警視庁から遠軽警察署に陳情団の上京を思い止まらせるよう連絡が入りました。当時の東京は、関東大震災から1年経過し、家も職もない人々が多く不穏な社会情勢下であり、政府への不満要素をこれ以上増やしたくない、という狙いがあったのです。しかし時すでに遅く、この連絡が遠軽に届いたのは陳情団の東京到着前日である11月12日でした。



石北鉄道速成陳情団 上京の際 遠軽駅前にて

東京芝の増上寺と泉岳寺に宿舍としての使用許可交渉を行っていましたが、警視庁の意向で断られ、やむなく新宿のホテルを拠点としながら活動を開始しました。



旭川遠軽間 鉄道陳情書

旭川遠軽間 鉄道請願書

陳情団は、陳情ののぼりを手に、カボチャ弁当を腰にぶら下げ、私服警官の監視の下、鉄道省、国会、政党本部等、関係機関に陳情を繰り返しました。このカボチャ弁当は、遠軽から貨物列車で送られ、それを宿で煮て、弁当にしながら活動を行いました。「貧しい農民は鉄道がなければ安、米が食べられない。交通が不便なために輸送費がかさみ、農家の経済が圧迫され、毎日カボチャばかり食べて凌いでいる」と、彼らは地元の悲惨な現状を切々と政府に訴えました。国会の控室などでカボチャ弁当を広げて食べる百姓風の異様な風景は、東京中の新聞や雑誌に「カボチャ団体」の陳情」として大きく取り上げられ、たちまち全国の同情と注目を集め、地方から「カボチャ団体」を励ましに来る者も多く現れました。

11月15日、鉄道省で仙石鉄道大臣と会談の際には、警官11人が団員の警備にあたり、さらに大勢の新聞記者が同席するという物々しい中で陳情が行われました。団長が「鉄道が開通すれば毎日カボチャばかり食べずに済む」と訴える席上で、突然白滝の新保国平が進み出て、「団長の言われるとおりです」と言って泣き出すと、これに続いて団員たちも泣いたのです。悲痛な彼らの熱意に大臣も動かされ、警備の警官までもがもらい泣きするという、まさに感極まる請願活動でした。カボチャ団体の必死の叫びと世論の高まりにより、ついに政府から石北線の敷設工事の約束を得て、彼らは10日間にわたる大きな使命を果たしました。

陳情から翌年の大正14年9月、国は遠軽〜丸瀬布間の鉄道敷設を認可。同年11月から石北線最初の工事は開始されました。昭和2年、遠軽〜丸瀬布間が開通。昭和4年には丸瀬布〜下白滝間、下白滝〜白滝、上川〜中越間が開通。そして昭和7年、ついに石北線全線が開通し、涙ながらの凄まじい陳情運動はここに実を結びました。

開拓期より交通の要衝として栄えたこの町の象徴である遠軽駅は、平成27年に開設100周年を迎えました。現在石北線は、鉄道事業見直し対象となり、存続危機に瀕しています。鉄道敷設のために尽力した先人たちの熱い想いを次世代へ遺すため、より多くの方に知っていただきたいと思っております。



平成25年 遠軽駅周辺



昭和30年頃 遠軽駅

この記事の内容に関する詳しいお問合せは)

遠軽町役場

TEL:0158-42-4811(代表) FAX:0158-42-3688
http://engaru.jp/